DNA

†李陽†

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＤＮＡ

【Ｎコード】
Ｎ２６０５ＢＡ

【作者名】
†李陽†

【あらすじ】
田舎過ぎず都会でも無い町に住んでいる高校二年生の高橋　隼人。夏休みの始め、バイトが終了して家に帰り持って帰った余り物の弁当を食べようとしたところ。
稲妻と共にボロアパートの天井を突き破って一人の少女が降ってくる。銀髪、赤眼をした美少女だ。混乱する隼人に構うこと無く、強烈な一言を放つ少女美少女。
「あなたの遺伝子を貰いにきました」
生殖遺伝子を採取する為に現れた、平行世界の地球人だというのだ。

クラスのアイドルに一途な思いを抱いていた隼人は、頑なに拒否する。
しかし少女も泣き落としを使って隼人を追い詰める。
さすがに警察に届けるわけにもいかないと判断した隼人はしぶしぶ部屋に住んで良いことを了承する。
「俺をホレさせてみせろよ！　そしたら……くれてやるよ……俺の遺伝子……」
平行世界人と奇妙な同棲生活が幕を開ける。

第　1話　不幸体質<Unhappy Attractor>

田舎では無い、かと言って都会かと言うと全然そんなことは無い。少し大きめのターミナル駅があり、駅前にはバスターミナルがある。でも、駅には駅ビルがある訳では無くて、少し大きめのスーパーマーケットがあるだけだ。

そんな町に住んでいる高校二年生の高橋隼人（たかはし はやと）１６歳。顔もブサイクでは無いが、取り立てて男前という訳でも無いし、身長も日本人男性平均の一七二センチ、体格は引き締まってはいるが、ムキムキという訳ではない。はっきり言えば普通というジャンルに入る男だ。そんなこの中途半端な町から在来線で二駅ほど上ったところにある県立高校に通っている。

家族構成は両親との三人家族だったが、事故で他界してしまい今は一人である。隼人は、両親が死んだのは自分の所為では無いか？

そんな風に考えていた。もちろん、自分が直接関わって両親が事故に合った訳では無い。そんな考えに到った理由というのは、隼人が生まれながらに持っている不幸体質（アンハッピー・アトラクター）による物だ。

小さい頃から、遠足の日になると前夜食べた物にアレルギー反応、又は食中（しょくあた）りを起こして遠足には参加出来なかったり、国際的テロが発生して遠足その物が中止になったりした。洩れなく貰えるというキャンペーンに応募しても貰えない事すらある。

そんな不幸な隼人にも他の人と等しく訪れる幸福という物がある。今日は終業式、明日からは夏休みなのだ。何度追い払っても現れる、隼人の寝室の網戸に止まる蝉が奏でる鳴き声（ふうぶつし）も、今日ばかりは夏らしくて良いとさえ感じさせられてしまうから不思議である。もちろん、夏だから、夏休みだからと隼人に幸運が訪れる訳では無いし、一夏のアバンチュールがあるとも思えない。ただ、高校生らしく長い休みがあるというだけで幸せに感じてしまうのだ。

隼人は本日の予定を確認する。

（今日は……終業式が午前中で終了。一三時には帰宅出来る。午後は……一五時から弁当屋のバイト。夜の二一時に終了予定と）

終業式からバイト開始までの時間が微妙に、というか中途半端に空いている。何かしたいような気がするけど、何も出来ない、そんな中途半端な時間だ。こんなことも隼人にとってみれば日常茶飯事だ。その微妙な時間については、学校に少し残って、恐らく配られるであろう、夏休みの宿題を進めて、バイトの時間に合わせて学校を出れば万事問題無い。

隼人は、中学時代からの癖で付けている手帳を確認した後閉じると、制服のお尻にある左ポケットに突っ込む。隼人はお尻の右ポケットに長財布、左ポケットに手帳。そして、前ポケットの右に鍵を入れるのが習慣だ。

元栓、蛇口、窓の戸締り、ボイラーの電源、部屋の電気、電源プラグ全てを指差し確認でチェックしていくと、スポーツシューズを突っ掛けて外に出る。部屋のカギを掛けた後、指差し確認でチェックすると、学校に向かうのだ。隼人は自らの不幸体質を過小評価はしない。何か小さな切っ掛けでも残そう物なら、いつ牙を剥くか分からないのだ。

隼人は、自転車置き場で三重カギを付けた中古購入の四代目ママチャリのパンク確認を手早く済ませると、それに跨(またが)って駅へと向かう。もちろん、途中でも細心の注意を払ってだ。隼人の敵は、ある意味アメリカの特殊部隊など目じゃない程の強敵である。ヘタをすると空を飛ぶ天道虫(てんとうむし)すら死に直結する程の脅威になりかねないのだ。

ただ、殺伐とした雰囲気をばら撒きながら登校できるほど非常識では無い。あくまで意識だけを注意に払い、見た目には到って普通に見せる。その技を身につけるまでは、殺気立った視線を周囲にバラ撒いていた所為で、外を歩けば不良に絡まれるなんていうのは、

もはや日常だった。最初は謝って許して貰っていたが、性質が悪い中にもピンからキリまでいる。中には問答無用で手を出してくる者もいるのだ。中学一年の時に、殴りかかられた際防御するために上げた手の肘が相手の顎先にクリーンヒットし、それ以降は謝ってダメな際は撃退する必要が出てしまった。そして、撃退した数が増えて行くと、今度は挑んでくる者まで出てくる。それに関しては謝って許して貰うと言う選択肢が、そもそも存在しないので益々撃退数は増加して行った。気付くと周囲では有名な不良の中にラインナップされてしまっている。なんとも不幸である。

そんな事があった所為で、成績や学校での態度が良かったにも関わらず、推薦入試が出来なかった。仕方なく、近くでも一番まともな県立高校を受験して合格を勝ち取ったのである。

あの時は大変だった……等と考えながら、改札口を無事に通過、何事も無く電車に乗り込んだ。

（オカシイ……こんなに何も無い朝は初めてじゃないか？）

隼人が、そんな疑問を浮かべ今以上の注意を払いながら学校に辿り着くも、やはり何も起こらない平和な登校で終わった。もしかしたら、終業式や下校で起こるかもしれない。しかも、朝起こらなかった不幸が上乗せされた物が来る可能性すらある。そんな考えから、周囲にも分かる程の殺気立ったオーラを放ちながら終業式を無事に終えて、ついに最後のホームルームまで辿り着いた。

（まさか……このまま何も起こらないなんて事があるんじゃ……）

隼人の心配とは裏腹に何事もなく終了するホームルーム。クラスメイトが置き勉[※1]していた教科書類をカバンの限界に挑戦するようにパンパンに押し詰めて帰っていくのを尻目に、バイトの時間まで中途半端に空いた時間を甲子園を目指して練習する弱小野球部でも眺

めながら夏休みの宿題を進めようかと教科書を開く、すでに帰宅の途に付いたはずの前席の椅子が引かれた。
何か忘れ物でもしたのだろうか？　それとも遂に一発目の不幸がやってきたのか？　そんなことを考えながら視線を教科書から上げると、隼人の目に映ったのは有り得ない光景だった。
なんとクラスで一番人気、いや……学年でも五本の指に入るほどの人気を誇る上野菜緒（うえのなお）が目の前に座っていたのだ。こげ茶に染めたセミロングの髪の一部をちょっとだけ縛ってアホ毛のような毛束を作った髪型。色白で背も少し低め、おそらく一五〇センチ弱。全体的に線が細いのに、しっかりと主張する胸。ナチュラルメイクでもしっかり自己主張する目はしっかりとした二重だ。そんな上野菜緒が隼人の眼の前に座っている。しかも、周囲を見渡してみると、廊下でこちらを伺いながら内緒話をしている上野菜緒の友人数名がいるだけで、教室自体には隼人と菜緒を除いて誰もいないのだ。
隼人が意を決したように生唾を飲み込んでから声を掛ける。

「ど、どうしたの上野さん」

ドモった。自分で考えていた以上に隼人は緊張していたようだ。
薄く頬を桃色に染めたまま、若干の間を置く上野に隼人の期待が最高潮を迎える。
上野が少し潤んだ瞳を上げて上目遣いのまま、ナチュラルメイクにも関わらず艶のある唇を静かに開く。

「夏休み、なんだけどさ……さっき、私の仲が良い友達三人と、クラスの祐次君、高木君の五人で海に行くことになってね。あと一人男の子欲しいよね～って話しになってさ、隼人君夏休みって暇ある？　一緒に行かない？」

隼人は万歳三唱でもしたい気分になった。こんな気持ちは、サッ

カー日本代表がブラジルを倒した瞬間をテレビで見ていた時以来のことだ。
そんな気持ちをオブラートで包んだ上に和紙で更にデコレーション、ついでに漆(うるし)まで縫って光沢を出した後、胸の奥に仕舞いこみ、徐(おもむろ)にお尻の左ポケットから手帳を取り出す。

「何日？　日程は決まってるの？」

よし、今度はドモらずに話すことが出来た。上手く平静を装うことが出来たと、心の中で盛大な溜息を吐きだした。
輝くような笑顔を浮かべて、携帯電話を取り出す上野、それを見た隼人は内心で『あちゃ～……』と思っていた。

「隼人君、携帯電話持ってるよね？　日程決まったら連絡するから番号とメアド交換しよ！？」
「ゴメン、携帯持ってないんだ……」

まさか、こんな”えげつない”方法で来るとは、甘く見ていたよ不幸体質(アンハッピー・アトラクター)。隼人が内心、泣きながら、だけど表には出さず苦笑いを浮かべると、何故か上野が少し泣きそうな顔をしていた。

「ど、どうしたの！？」
「私に、番号教えたくないの？」

そう、今日(きょうび)日、小学生すら携帯電話を持ってる時代である。高校二年生にもなって、携帯電話を所持していないというのは、今時珍しいのだ。
そんなことよりも、今は上野が泣きそうな顔をしていることの方が、隼人にとっては大問題だ。直ちに対応する必要がある。しかし、悲しいかな本当に携帯電話は持ってないのだ。

「う、上野さん！？　本当に携帯持ってないんだ。俺の家って一人暮らしで生活費とか、自分でやりくりしてるから、携帯電話の基本料金さえ出費はキツクてさ！」

上野の表情がみるみる明るくなる。最終的には、またキラキラ輝くような笑顔に戻っている。いや、心なしか先ほどよりも輝いて見えているのは、隼人の眼が勝手に付けているエフェクトなのかと言えば、それはちょっと違うようである。

「隼人君って高校生なのに一人暮らしなの！？」

一般的に地元の高校に通う色が強いこの中途半端に田舎な地域は、高校進学の為に一人暮らしするような人は多く無い。もし、親元を離れて暮らすとなれば、それは全寮制に入ることを意味している。それくらい考え方が古い地域なのである。そこに、一人暮らしをしている高校生が一人入ると、途端に溜まり場扱いされるのは目に見えて明らかだ。そんな理由から”一人暮らし”ということを秘密にしていたのだが、まさかこんなに早く切り札を切ることになるとは、隼人は考えていなかった。

「あぁ～……うん。皆には内緒だよ？」
「内緒……うん！　二人だけの秘密ね！」

上野の表情が眩しい。隼人には太陽に虫眼鏡を向けたように眩い光が降り注いでいるかのように感じていた。

「でも、そしたら……予定が決まっても連絡取れないね……」
「あぁ～……うん。仕方ない」

隼人は手元にあったノートの一部を切り取ると、ボールペンで住所を書き込んでいく。手元が明るく感じたのは気の所為ということにしておこう。隼人は、気持ち急いで住所を書き上げると、裏面に簡単な地図を描き入れて上野に渡した。

「これも、皆には内緒でよろしく。日程が決まったら、手紙でも出してよ」

「内緒ね！　大丈夫よ！　じゃあ日程が決まったら、教えに行くね！」

「いや、手紙で――」

「なんだか今年の夏は楽しくなりそう！　じゃあ、友達待たせてるから！　またね！　隼人君！！」

隼人は静止を呼び掛けるべく出した右手を静かに下ろすしかなかった。遠くで、『どうだった？　どうだった！？』『一緒に行ってくれるってさ！』『携帯番号はゲットしたの！？』『それは～……内緒！』『ズルイんだけど～！　私にも教えてよ！』『ダメ！　だって≪二人だけの秘密≫だもん！』『意味深だね～』という内容が聞こえて来たような気がしたと同時に、隼人は自らのスルースキルがレベルアップした幻聴を聞いたような気がした。

なんだか一気に疲れた気がしたが、一応当初の通り、一時間ほど夏休みの宿題を進めると、バイト先に足を向けた。

バイト中も特に不幸は発生しなかった。いつもであれば、店の中までカラスが入り込んで、作りたての唐揚げを攫っていくこともあるのだが、さっきのような一見すると幸せな不幸というトラップもあるから気を引き締める必要があると、隼人は心を引き締めていた。

高校生が許されている時間のギリギリまで働いた隼人は、このバイト特有の特権である賄い（まかない）を食べる時間も無い代わりに、少し冷めてしまった売れ残りの弁当を最大三つまで持ち帰って良いというルールを行使すべく冷めた弁当ラインナップに視線を落としていた。

もちろん隼人は三つ持ち帰る。鍛えこまれた嗅覚で持って、一番状態が良い物を選ぶ、本日は、この店で売れ筋のナンバーワンのハンバーグ弁当、ナンバーツーの唐揚げ弁当、そして隼人の大好きな山菜おこわ弁当の三つだ。

これは、後で大きなしっぺ返しが来ると、こころを引き締めながら帰路に付くも、何事も無く自宅へと辿り着いた。着くなり、窓を開けて籠った空気を追い出すと、制服をハンガーに掛けて、タンクトップにハーフパンツという格好に着替える。

きっとたまには神様も俺の様な不幸体質（アンハッピー・アトラクター）に休息をくれるのかな？

などと考えながら、部屋の真ん中にある”ちゃぶ台”へ弁当を広げた。

手を合わせて『いただきます』を言おうと口を開いたその時、開けていた窓から強めの風が吹き込んでくる。外で雷雨を伴う大雨が通りかかったのだろうか。そんなことを考えながら、窓を閉じようと立ちあがり、窓に手を掛けた瞬間、眩しい光と共に大きな稲妻の音が響いた。

少し送れるように響く振動。明らかに自分の真後ろに大きな力を持った何かが、物理的破壊を伴って、隼人の弁当を粉々にしたことが窺（うかが）えた。咄嗟のことで何も出来ずに外を見たまま佇（たたずむ）む隼人。

まさか、油断した瞬間にこんな仕打ちとは、部屋に雷が落ちるなんて有り得ない。それでも死ななかったというのは、むしろ幸運なのか？　自分でも答えが出ないような、半ば自らを慰めるような思考に浸りながら、振り返った隼人の目には信じられない物が映っていた。

大きくはないシルエット。透けるように白い肌。銀色で長い真っ直ぐの髪。大きく少し釣り上がった目。長いまつ毛。真っ赤な瞳。近未来映画に出て来そうな布の少ない服。スレンダーな手足。自己主張しすぎない胸。見たことも無い機械。それらで構成された、一種の神々しささえ感じる少女を最後に彩るのは、少し幼くも見える

が整った顔立ち。誰が見ても同じように評価するだろう。『美少女だ』と。

その『美少女』が、ゆっくりと立ちあがる。天井こそ大穴が開いているものの、弁当は全て無事、ちゃぶ台も現在土足で踏みにじられているが形状を保っている。『美少女』が一歩踏み出す。すると、細い四本脚によって絶妙なバランスを保っていたちゃぶ台が、バランスを失って引っ繰り返る。宙を舞うさっきまでは奇跡的に無事だった弁当達は、敢え無く床へと落下しゴミ箱へ直行すること間違いない状態へと変貌を遂げた。そして、当然一緒に引っ繰り返った『美少女』は床に顔面を強打し、沈黙している。

少しの間を伴って、顔をあげた『美少女』は鼻の頭を赤くしながら、恥ずかしげも無く言い放った。

「高橋隼人さん、あなたの遺伝子を貰いに来ました」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2605ba/

ＤＮＡ

2012年1月6日17時58分発行